

アイヌ民族：歴史と現在

—未来を共に生きるために—



公益財団法人アイヌ民族文化財団

はじめに

この本は、アイヌ民族^{みんぞく}について小学生のみなさんに知ってもらうために作りました。

今の日本の社会科の教科書に書かれていることの、ほとんどは和人^{わじん}の社会や文化についてです。しかし、日本には和人だけがくらししてきたわけではなく、アイヌ民族も昔から日本列島^{れつとう}に住んできました。そこで、アイヌ民族の歴史や文化について学んでもらうのが、この本の役目^{やくめ}です。

21世紀をむかえた現在、日本にはさまざまな民族がくらししています。また、インターネットや電子メール、衛星放送^{えいせい}などで、どこに住んでいても世界各地と密接^{みっせつ}に結びつくようになっています。そうした中で国際社会^{こくさい}に生きる一員として、よりよい社会づくりをするためには、それぞれの民族の持っているいろいろな歴史や文化を知り、認め^{みと}あうことが大切です。

大昔から今までのことをこの小さな本にまとめています。なかには少し難^{むずか}しくて今読んでもよくわからないところもあるかもしれません。どうかこの本を大切に、高学年になってからも、何度も読み直してください。

和人

日本の中で一番人数の多い人たちのことを、アイヌ民族に対して「和人」と呼びます。

2024年9月

公益財団法人アイヌ民族文化財団

写真・資料提供（敬称略）

写真1-1(有)さっぽろフォトライブ／写真1-2『蝦夷嶋図説』「ウリ乃図」函館市中央図書館／写真1-3 東京国立博物館蔵 Image:TNM Image Archives Source:<http://TnmArchives.jp/>／写真1-4 北海道大学植物園／写真1-5『蝦夷嶋図説』「アツシカル乃図」函館市中央図書館／写真1-6『蝦夷嶋奇観』「タフカリ図」函館市中央図書館／写真1-8 北海道大学植物園／写真1-10児玉マリ／写真1-11児玉マリ／写真1-12「はちまき」「脚絆」「ぼうし」北海道大学植物園／写真1-13『明治初期アイヌ風俗図巻』「鹿捕り」函館市中央図書館／写真1-14『蝦夷嶋奇観』「衡鮭図」函館市中央図書館／写真1-16幕別町蝦夷文化考古館／写真1-17幕別町蝦夷文化考古館／写真1-18幕別町蝦夷文化考古館／写真1-19北海道博物館アイヌ民族文化研究センター／写真1-20北海道博物館アイヌ民族文化研究センター／写真1-23北海道博物館アイヌ民族文化研究センター／写真1-25斜里町立知床博物館／写真1-26『蝦夷嶋図説』「シヤリキキタイチセの図」函館市中央図書館／写真1-27『蝦夷嶋図説』「トツプラツプキタイチセ乃図」函館市中央図書館／写真1-28『蝦夷嶋図説』「ヤアラキタイチセの図」函館市中央図書館／写真1-30上土幌アイヌ協会／写真1-32千歳アイヌ協会／写真1-34長谷川充／写真1-35北海道野生動物研究所／写真1-42白老民族芸能保存会／写真1-44『明治初期アイヌ風俗図巻』「熊祭後の大祝宴」函館市中央図書館／写真1-46公益社団法人北海道アイヌ協会／写真1-48帯広カムイトウボボ保存会／写真1-50北海道大学植物園／写真1-52『ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵アイヌ資料目録』草風館より転載／写真1-54市立函館博物館／写真1-56個人蔵／写真1-57『明治初期アイヌ風俗図巻』「土人のシヤコロベ語り」函館市中央図書館／写真1-58『蝦夷見聞誌』「ユウカルを語る図」北海道立文書館／写真1-59 1978年『サコロベの世界』札幌テレビ放送より転載／写真1-60 1995『カムイユカラ』片山言語文化研究所より転載／写真1-62NPO法人知里森舎／写真2-1 市立函館博物館／写真2-2 上ノ国町教育委員会／写真2-3 新ひだか町アイヌ民俗資料館／写真2-4『古代蝦夷風俗之図』北海道大学附属図書館／写真2-5 根室市教育委員会／写真2-6『蠢動変態図』「アイヌの戦いのようす」北海道博物館／写真2-7 公益財団法人松浦史料博物館／写真2-8『蝦夷嶋奇観』「へロコイキ図」函館市中央図書館／写真2-9「ゑぞ人うゑほうそうの図」函館市中央図書館／写真2-10北海道大学附属図書館／写真2-11複製写真：北大図書館撮影協力／写真2-12北海道大学附属図書館／写真2-13北海道大学附属図書館／写真2-14個人蔵／写真2-15北海道大学附属図書館／写真2-16草風館／写真2-17大阪人権博物館／写真2-18公益社団法人北海道アイヌ協会／写真2-19公益社団法人北海道アイヌ協会／写真3-2 札幌アイヌ文化協会／写真3-3 北海道新聞提供／写真3-6 レラチセ／写真3-7 個人蔵／写真3-8 モシリ企画／写真3-9 アイヌ・アート・プロジェクト／写真3-10川村則子／写真3-11結城幸司／写真3-12個人蔵／写真3-14写真提供・国際連合広報センター（UNIC）／楽譜A 舎川芽生・採譜／楽譜B 石黒文紀・採譜
上記以外の写真・資料は当財団所蔵

イラスト：鈴木 隆一
表紙、4-5p 見開、
24-25p 想像図
デザイン：須田 照生

アイヌ語の書き方について

アイヌ語には「ㇰ」「ㇱ」「ㇴ」「ㇵ」「ㇶ」「ㇷ」「ㇸ」「ㇹ」「ㇺ」「ㇻ」のように、日本語にない発音があります。例えば「ユカラ」の「ㇷ」のように小さく書きます。読む時には軽く発音します。

もくじ

アイヌ語の名称	4
1. アイヌ民族の文化	6
1 アイヌ語の地名	6
2 衣服	8
3 食べもの	10
4 住まい	12
5 信こう	14
6 歌とおどり	16
7 楽器	18
8 文芸	20
2. アイヌ民族の歴史	22
1 縄文文化からアイヌ文化へ	24
2 コシャマインの戦い	26
3 シャクシャインの戦い	28
4 クナシリ・メナシの戦い	30
5 漁場ではたらくかげで	32
6 北海道の「開拓」とアイヌ民族	34
7 北海道旧土人保護法	36
8 アイヌ協会を作る	38
9 先住民族として	40
3. アイヌ民族の文化と現代社会	42
1 いろいろな文化が共に生きる社会に	42
2 アイヌ文化の精神を今に生かす	45



カピウ

ポンモシリ

レフ

フンペ

レブンカムイ

アトウイ

シララ

ペップッ

オタ

ヤ

ペツ

トウレフ

ニタイ

モユク

カムイチェブ

イソポ

ユク

キムンカムイ

カント

ニシ

ヌプリ

ピラ
イタオマチッ

トマリ

セタ

コタンココカムイ

チセ

ヌサ

チッ

プ

セツ

パシクル

マレク

ト

スマリ

ソ



写真1-1：利尻島—北海道の北、日本海にうかが島

アイヌ語で「リシリ」と言い、リは「高い」、シリは「島」という意味です。

よび名のとおり、島は高さ1,721mの高い山（利尻山）からできています。



1. アイヌ民族の文化

アイヌ語がもとになっている北海道の地名の例

旧鳥取町（釧路市）

鳥取県出身の士族（もとの武士）が集団で住みつけたため。

北広島市

広島県出身の人たちが集団で住みつけたため。

伊達市

仙台藩の巨理（今の宮城県巨理町）の領主だった、伊達邦茂という人が、家来といっしょに移り住んだため。

仁木町

徳島県から移り住んだ人たちが仁木竹吉という人が先導して、土地を切り開いたため。

1 アイヌ語の地名

人が住んでいるところには、必ず土地の名前である「地名」があります。この地名のほとんどは、その土地や地方に古くから住んでいた人たちが付けて、長い間よび続けてきたものです。

北海道には、本州などから移ってきた人たちが住んでいた県の名前、その土地を切り開いて、田畑や住むところをつくった人の名前などから付けられた地名もあります。

しかし、北海道にある市町村などの地名を調べてみると、漢字の「別」や「内」や「幌」が付く地名が非常に多くあります。

それらはアイヌ語の「ペツ」や「ナイ」や「ポロ」がもとになったもので、それぞれ「川」「沢」「大きい」という意味があります。

北海道にある地名の多くが、アイヌ語がもとになっているということは、そこに最初に住み着いて長い間くらし続けてきたのはアイヌ民族だということがわかります。

「ウシ」「ボン」「トー」
「コタン」などの付いた地名をよく聞くけど、みんなの
まちや近くの地域の名前は
どうかな？調べて
みましょう。





写真1-2：ウル
クマの皮を使った衣服。



写真1-3：カヤハ
魚の皮で作った衣服。



写真1-4：チカプウル
羽のついた鳥の皮で作った衣服。

内皮

木の皮の内側にあるやわらかい皮。

せんい

木の皮や草から取れる、糸のような細長い物。

2 衣服

昔のアイヌの人たちは、ふだんの生活の中で、身近にある材料を使って、それぞれの地域ちいきに合ったいろいろな衣服を作っていました。

衣服の材料には、けものや魚、鳥の皮のほかに、オヒョウニレやハルニレ、シナノキなどの木のないひ内皮やイラクサのせんいなどが使われました。

動物	陸の動物	クマ シカ テン キツネ タヌキ ウサギ トナカイ オオカミ
	海の動物	ラッコ トド アザラシ アシカ オットセイ
	魚	サケ イトウ カラフトマス
	鳥	エトビリカ ワシ アホウドリ タカ ウミウ
植物	木	オヒョウニレ ハルニレ シナノキ
	草	イラクサ

衣服に使われた動植物

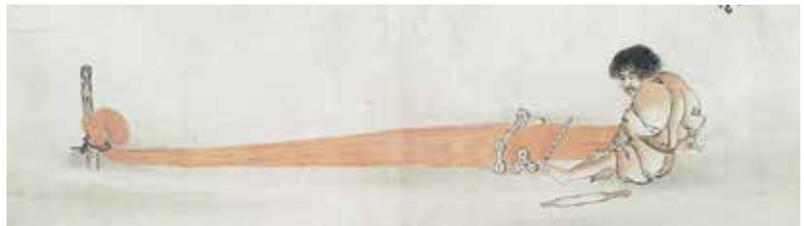


写真1-5：布をおっている様子をえがいた昔の絵

衣服の材料の中で一番古いのは、毛皮です。けものは、毛皮をとるだけでなく、食料としての肉のほか、ほねやすじを使って、かりの道具や食器、かざり物、糸を作るなど、人々の暮らしにとって一番身近かで大切なものでした。

昔の絵の中に、いろいろな時代の着物を着たアイヌの人たちが、いっしょにおどっている様子がえがかれているものがあります。衣服も他のものと同じように時代とともにうつり変わってきたのです。



写真1-6：いろいろな衣服を着ておどるアイヌの人たちの昔の絵



写真1-7: アットウシ
オホヨウの木のせんいで作った衣服。



写真1-8: レタラベ
イラクサのせんいで作った衣服。



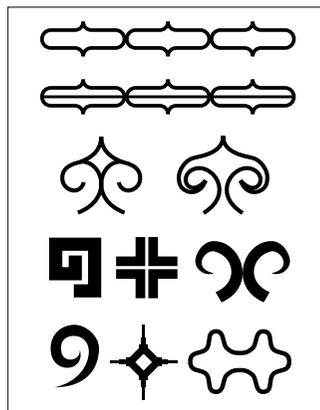
写真1-9: ルウンベ
もめんぬのを使って作った衣服。

本州や外国から「もめんぬの」を手に入れられるようになると、そのぬのを使って、儀式や特別な時に着る「晴れ着」を作ようになりました。今でも博物館などに残されている古い衣服のほとんどは、こうした晴れ着です。

晴れ着の中には、中国との交易で手に入れた「えぞにしき」とよばれる、きぬでおられた衣服や、和人との交易で手に入れた「じんばおり」などもありました。

衣服のほかに、身に付けるものには、儀式や働く時にする「はちまき」、手足を守る「てっこう」「きゃはん」、冬にかりをする時に使った「ぼうし」や、サケやシカの皮で作った「くつ」

などがありました。こうした衣服や身に付けるものには、アイヌもようが「ししゅう」されました。アイヌもようには、美しくかざるというだけでなく、病気をふせぐという、魔よけの意味もありました。



いろいろなアイヌもよう



写真1-10: えぞにしき



写真1-11: じんばおり



写真1-12: 身に付けるもの



写真1-13：雪山に入り、弓矢でシカをとる様子



写真1-14：マレックで川をのぼるサケをとる様子

かりや漁に使った道具



写真1-15：矢(アイ)と弓(ク)
シカやクマなどをとらえる時
につかった道具で、矢にはトリ
カブトという草の根から作った
もう毒がぬってありました。



写真1-16：つきかぎ(マレック)
川や湖でサケ・マスなどをと
る時に使った道具です。



写真1-17：もり(キテ)
海でアザラシやクジラなどを
とる時に使った道具です。



写真1-18：丸木舟(チブ)
川や湖などで、通行や魚をと
る時に使った舟で、カツラやヤ
チダモなどの木をくりぬいて作
りました。

3 食べもの

昔のアイヌの人たちは、野山で狩り^かをしたり、川や海で魚や貝をとったり、季節ごとに実る木の実や山菜^{ゆた}をとって豊かに^{ちいき}くらしていました。

しかし、とれるものは住んでいる地域^{ちいき}によってちがい、陸地の奥^{おく}の方に住むアイヌの人たちと、海辺の近く^{ないよう}に住むアイヌの人たちでは、食べるもの^{ないよう}の内容は、少しちがっていました。

狩りでは、シカやクマといった大きな動物や、タヌキやリス、ウサギなどの小さな動物のほか、エゾライチョウやスズメ、カケスなどの鳥もとりました。

大きな動物をとる時は、どく矢^{どく}を使いましたが、小さな動物をとる時には「しかけ弓」など、いろいろな「わな」^{わな}を使いました。

魚をとる時は、ささった時にカギ先が回転したり、モリ先が外れて体から抜けなくなるなどの工夫をした道具^{道具}を使いました。

狩りや漁のほか、アワやヒエ、キビといった「こくもつ」も古くから作られ、今から200年



写真1-19：チェアオハウ
サケの切り身の汁。

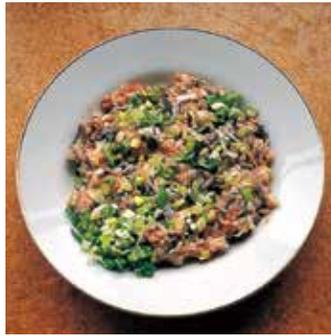


写真1-20：チタタフ
サケの頭やヒレを細かくきざんでネギをまぜたもの。



写真1-21：チポロシイモ
にてつぶしたイモにいくらをまぜたもの。

ほど前には、ジャガイモやトウモロコシ、大根、インゲン豆などを作っていたということもわかっています。

アイヌの人たちのふだんの食事は、朝と夕方しるの2回で、塩や動物の油で味付けをした「汁もの物」と「おかゆ」が中心でした。大切な食料であったサケは、身だけではなく内ぞうや頭・ヒレまで、すべて工夫して調理しました。

いろいろな儀式やお祝などの特別な時には、ふだんの食事に「ごはん」「だんご」「お酒」などがくわえられました。こうした料理は、集まった人たちだけではなく、なくなった先祖や神々もいっしょに食べて、楽しむものだといふアイヌの人たちは考えていました。

また、アイヌの人たちは、冬の間や「ききん」など、食べるものが少なくなる時にそなえて、食料をかんそうさせたり、「くんせい」などにしてたくわえました。オオウバユリの根からはデンプンをとりますが、その「しぼりかす」もだんごにして保存ほぞんしました。

	動物	植物
春	クマ	フキノトウ ギョウジャニンニク フキ
夏	マス イワナ ヤマベ ウグイ	コゴミ ワラビ ゼンマイ ヨモギ オオウバユリ
秋	サケ シカ ウサギ キツネ	クロユリ ハマナス 海草類 コクワ クルミ クリ ドングリ ノイチゴ ヤマブドウ キノコ
冬		

アイヌの人たちの食ごよみ



写真1-22：儀式の時の料理



写真1-23：チポロシト
いくらをまぶしただんご。



写真1-24：昔と同じ方法で建てた家（チセ）



写真1-25：チセを建てる時に柱の材料に使われるヤチダモ

いろいろな材料で作られたチセ



写真1-26：アシを使ったチセ



写真1-27：ササを使ったチセ



写真1-28：木の皮を使ったチセ



写真1-29：チセの骨組みの
もけい

4 住まい

昔のアイヌの人たちは、食べ物や飲み水などが手に入りやすく、こう水などのさい害にあいにくい交通の便利な川の近くや海辺に、数けんから十数けんの家で「コタン」とよばれる村を作りました。

そして「村おさ」を中心に、近くの山や川、海などの決まった場所^かで狩りや漁をしたり、木の实や山菜をとってくらしていました。

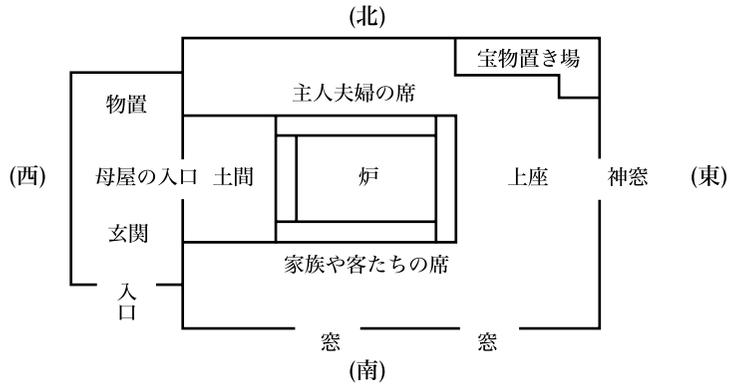
家のことをアイヌ語で「チセ」と言いますが、チセは20㎡～100㎡くらいの大きさで、その地方で手に入れやすい材料を使って、コタンに住む人たちが協力しあ^かって建てました。

柱などの骨組^{ほね}みには、ヤチダモなどのかたい木を使いました。屋根やかべにはアシやススキ、ササなどの草を使いましたが、キハダやカバの木などの皮を使ったという記録もあります。

骨組みや屋根・かべなどの材料は、くぎを使



写真1-30：チセのなかの様子



北海道新ひだか町でのチセの方位と間取りのひとつ

わないで、ブドウづるやシナノキの内皮でつくったひもなどを使って結びつけました。

チセの中に入ると、入り口近くに「炉」があります。炉は、「火」で部屋をあたためたり、食事をつくるだけではなく、大切な儀式にも使われました。窓は2、3か所ありますが、入り口の正面にある窓は、「神々が出入りする窓」として、とても大切にされ、外から中をのぞくことは許されませんでした。

主人や家族、客が座ったり寝たりする場所、宝物を置く場所なども、きちんと決められていました。

チセの周りには、いのりの場である「祭壇」や、食料をかんそうさせるための「物ほし」、食料をたくわえておく「倉」、つかまえた子グマをかうための「おり」、男女別の「便所」などが作られました。

また、コタンの近くには「水のみ場」や丸木舟をつないでおく「船着き場」などもありました。



儀式のための祭壇



ネズミなどをふせぐため床を高くした倉には、かんそうさせた食料をたくわえています



「クマ送り」の儀式までの間、子グマをかっつけておくおり



男女別の便所

写真1-31：家の周りにある建物やしせつ



写真1-32：カムイノミの様子



写真1-33：儀式で大切な役目をはたす火

5 信こう

アイヌの人たちは、動物や植物、火や水などのほか、うすやきねといった生活用具など、人間が生きていくために必要なものや、病気など人間の力ではどうすることもできないものを「カムイ（神）」としてうやまいました。

カムイは、人間に恵みをあたえたり、いろいろな役わりを果たしたりするために自然や物にすがたを変えて人間の世界にやって来ると言われますが、地震や津波などの自然災害や命を落とす病気などは悪いカムイのしわざだと考えました。

また、アイヌの人たちには、「自然を保護する」という考えはなく、カムイと人間は、それぞれがおたがいに支えあって生きているものであり、人間は自然世界の一部として、そこに住まわせてもらっていると考えていたのです。

人間の世界での役わりを果たしたカムイは、やがて家族や仲間が待っている神々の世界へ帰ることになります。その時、アイヌの人たちは、



写真1-34：シマフクロウ(上)
写真1-35：クマ(下) シマフクロウとクマは、村を見守ったり、肉や毛皮をもたらず、位の高いカムイとしてそんけいされます。

カムイノミ

「神々へのいのり」のこと。神々に見守られているおかげで、人びとの平和なくらしがあると考え、そうしたくらしが続くことを願って行われました。

神々へのいのりは、まず「アペフチカムイ」とよばれる火の神に対して行われます。火の神が人間の願いを他の神々にとどける役目を持っていると考えられているからです。



写真1-36：クマのイオマンテ

自分たちの生活に必要なカムイがふたたびやって来ることを願い、カムイを神々の世界に送り帰す儀式を行います。こうした儀式の中で、一番大きくて重要なのが、イオマンテです。

儀式では、カムイが喜ぶとされる木幣（イノウ）やお酒、だんご、ほしたサケなどの食べ物をそなえ、感しゃのいのりをささげます。

人間が動物をとらえて、肉や毛皮を手に入れるということは、その動物の命を奪うことです。しかし、アイヌの人たちは、その肉や毛皮を受け取るかわりに、最高の礼をつくしてカムイを神々の世界へ送り帰すことで、また、そのカムイが動物にすがたを変えて人間の世界にやって来ると考えたのです。

こうした儀式は、生き物だけでなく、使っていた道具が古くなったり、こわれて使えなくなった時にも行われました。ゴミとしてすてるのではなく、食べ物をそえて神々の世界にいていねいに送り帰したのです。

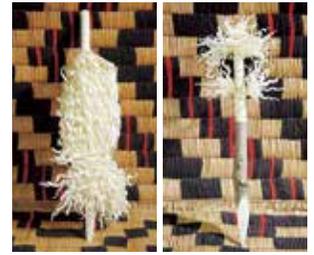


写真1-37：儀式に使ういろいろな木幣（イノウ）

イオマンテの時に使われるいろいろな道具



写真1-38：トゥキ
お酒を入れるおわん。



写真1-39：キケウシパスイ
お酒をカムイにささげるへら。



写真1-40：ヘペレイ
クマをいる花矢。



写真1-41：クマのイオマンテのことをかいた絵本



写真1-42：すわり歌（ウポポ）
白老民族芸能保存会。



写真1-43：鶴の舞（サロルンチカプリムセ）



写真1-44：イオマンテ（れい
送り）の後に、ウポポを歌って
いる様子をかいた昔の絵



写真1-45：シントコ
儀式に使われるお酒や宝ものを
入れておく入れ物。



写真1-46：きねつきのおどり
静内民族文化保存会。

6 歌とおどり

アイヌの人たちは、儀式の時や親しい人たちが集まった時に歌ったりおどったりしました。また、仕事をしながら歌うこともありました。

歌やおどりには、神々に感^ぎし^{しき}の気持ちを伝えるとともに、ふだんのくらしの中での喜びや悲しみを神々と分かち合いたいという気持ちがこめられていました。

歌やおどりは、その形や方法によっていろいろな種類があります。イオマンテなどの儀式の時の歌やおどり、「きねつき」などの仕事をすする時や、赤ちゃんをあやす時の歌、歌い手が「自分の気持ち」をその場で歌にして歌う歌などがあります。このほかに、長くおどり続けて体力くらべをする遊びのおどりなどもあります。

ウポポとよばれる「すわり歌」は、数人の歌い手がシントコのふたを囲んですわり、みんなでふたを軽くたたいて「ひょうし」をとりながら歌われます。

ウポポは、短い歌の言葉を、少しずつずらして



写真1-49: ムックリをひく女人



写真1-50: いろいろな大きさのムックリ



写真1-51: いろいろな楽器の絵
 たんけん家の松浦武四郎が、
 150年ほど前にかいたアイヌの
 人たちのいろいろな楽器です。
 ひとつひとつの楽器と、それ
 をひいている人たちの様子が記
 録されています。

7 楽器

◎ムックリ

ムックリはアイヌの人たちの楽器の一つで、
 「口琴^{こうきん}」ともよばれています。

材料は竹などを使い、長さは10~15cmくらい
 で、はばは1cm前後、あつきは2mmくらいです。

板の真中には弁^{べん}という切りこみがあり、えん
 そうする時は、弁のはじに付けたひもを引いて
 弁をしん動させます。

ムックリは、そのしん動を口の中の空気に伝
 えてならず楽器です。

ムックリのつくり

左手の小指をかけるひも

ここを左手の人さし指と親指で
 はさみ、ムックリを固定します。

右手
 で引く
 ひも

(表側)

弁

写真1-53: カニムックリ



鉄でできたムックリで、シベ
 リアから伝えられたものと思わ
 れます。

(うら側)

ここは、うすくけずられていて
 しん動しやすくなっています。



写真1-52: その他の楽器

サハリン(樺太)で使われてい
 た「たいこ(カチャ)」です。大き
 さは40~50cmくらいで、丸いわ
 く片方に皮をはり、細長い木
 に毛皮などをまいたバチでたた
 いて音をならします。楽器とい
 うより、儀式的の道具として使わ
 れていました。



写真1-54：シコタン島で発見された昔の3弦トンコリ

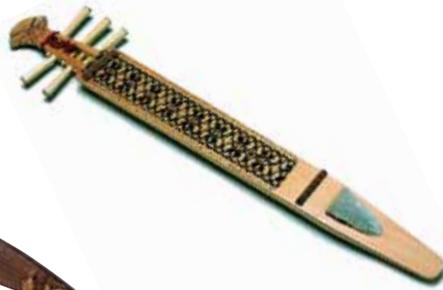


写真1-55：アイヌもようの入った5弦トンコリ

◎トンコリ

主にサハリン（樺太）に住んでいたアイヌの人たちの楽器で、弦を両手の指ではじいて音を出します。音は和楽器の「琴」に似ています。

男の人は「あぐら」をかいて、トンコリを左かたに立てかけて、女の方は「正ぎ」をして同じように左かたに立てかけてひきます。

トンコリについて
 トンコリは「箏」の仲間で、材料には、エゾマツ・トドマツ・オンコ・ホオノキ・ハルニレ・ナナカマドなどが使われます。
 長さは70～120cmくらいのもものがふうですが、時には150cmくらいの長さのものもあります。
 はばは、10cmくらい、あつさも形によっていろいろありますが、5cmくらいのもが多いようです。
 弦はシカやトナカイの足のスジなどを使いました。また、イラクサのせんいによって糸にしたものを使ったこともありました。弦はふうは5本ですが、3本や6本のものもあります。
 曲は自然世界のさまざまな音や、動物の声・動きなどを表していますが、病気やさいなんを取りはらうためのいのりにも使われました。

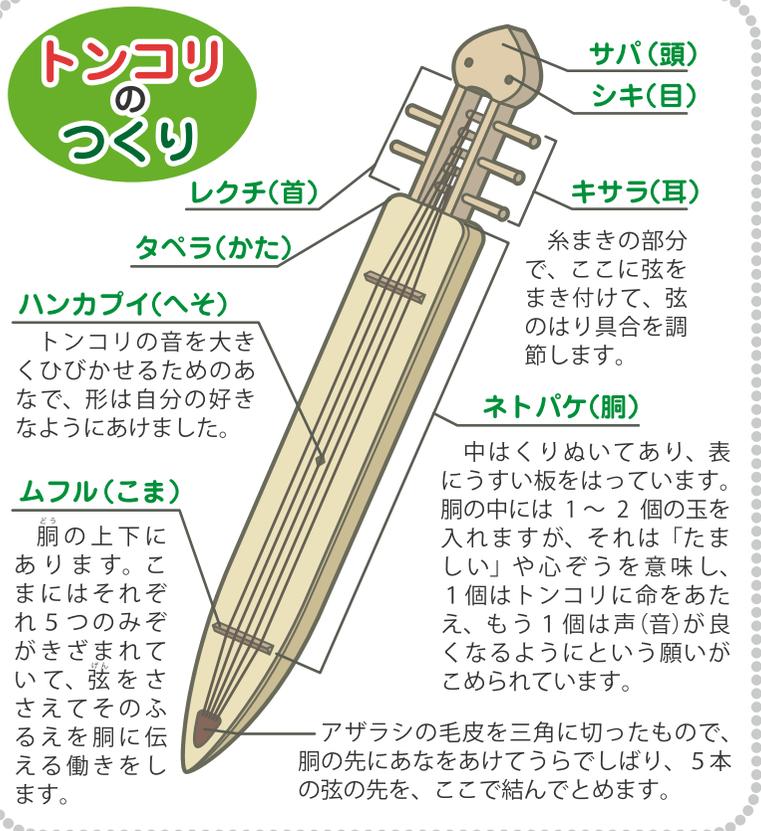


写真1-56：座ってトンコリをひく女人



写真1-57 (左) 写真1-58 (右) : 英雄の物語 (ユカラ) を語るアイヌの人をえがいた昔の絵

ユカラの一部分から

私を育ててくれるお婆の家の宝物を置く所に、シカの角のある衣がありました。お婆がねている間に、私はその衣を着て外に出ました。人は通ってはいけないという道を通して「神の遊び場」に着きました。

池に飛びこんで泳いでいると、男たちがやってきて私を見つけ「シカだ、矢をうて」とさげび、矢をたくさんうってきました。私はそれを角でボンボンと受け一つも当たることなく、男たちに向かって行きました。ほとんどの男はにげましたが、一人の大きな男が向かってきました。でも、私は角ですくって池の中にさかさまにしでしめてやりました。

家に帰ってみると、お婆はまだねていたので、静かに衣をぬいてもとからねていたようにしてねました。(語り・八重九郎)

8 文芸

アイヌの人たちが、長い時間をかけて受けついできた文化の一つに、『口承文芸』^{こうしやうぶんげい}があります。

口承文芸とは、文字で書かれたものを読むのではなく、語り手の話を聞いて楽しむものです。

口承文芸はいろいろな種類がありますが、その中の物語は、大きく「英雄の物語」「神々の物語」「むかし話」の3つに分けられています。

◎英雄の物語

「ユカラ」とも言われるこの物語は、空を自由に飛びまわったり、海に深くもぐったり、岩や土の中でも通りぬけることのできる「超人^{ちやうじん}的^{てき}」な少年が主人公で、自分を育ててくれた一族のてきとのはげしい戦いなどを内容としています。

これを語る人は、木のぼうで炉のふちをたたいてひょうしをとりながら節^{ふし}をつけて語ります。長い物語には、語り終えるのに何日もかかるようなものもあります。



写真1-59: ぼうでひょうしをとりながら「ユカラ」を語る八重九郎

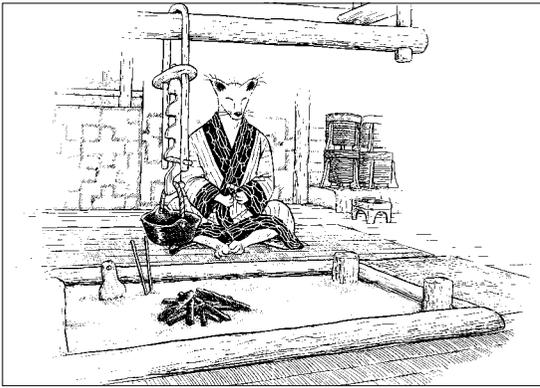


写真1-60:『カムイユカラ』にかかれた
キツネのカムイのさし絵 (成田英敏・絵)

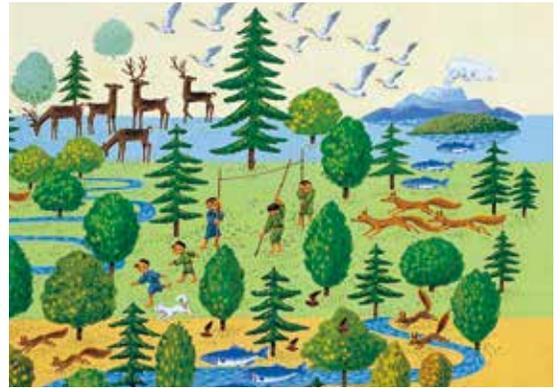


写真1-61:絵本になった昔話
『ポロシルカムイになった少年』(北市哲男・絵)

◎神々の物語 (カムイユカラ)

主人公である動物や植物などの神が、神の世界や人間の世界で体験したことを語る物語で、「サケへ」とよばれるくり返しの言葉をはさんで、節をつけて語られるという特ちょうがあります。

昔のアイヌの人たちは、子どものころからこのカムイユカラを何度も聞くことで、神々と人間ちえの関係を学び、生きていく知恵を身に付けたとされています。

カムイユカラでは、アイヌの女性・知里幸恵ちりゆきえの書いた『アイヌ神謡集』が特に有名です。

◎むかし話 (ウエペケレ・ウチャックマ)

節をつけずに話される物語で、登場人物も人間やカムイ、動物、道具などいろいろです。内容は、主人公がいろいろな苦勞きげんや危険にあいながらも、最後には心がけの良い者は幸せになり、悪い者にはばちがあたるという形が多く、社会や自然の中で生きていくための心がけを示したものでした。



写真1-62:『アイヌ神謡集』を書いた
知里幸恵(十四歳の頃)

カムイユカラ 『ヤチダモの木の神』が 語る物語の一部

私(ヤチダモの木の神)が滝の上に立っていると、オキクルミがたくさんの道具を持ってきて「この悪者め。お前のかたい肉を引っこめてやわらかい肉を出したなら、お前を舟にして商売にいくからな」などと悪口を言って切り倒そうとした。私は腹が立ったので、反対に固い肉を外に出して切れないようにしてやった。

しばらくすると、サマイエクルがやってきて、私の前に礼正しく座って2、3度おいのりをし「ヤチダモの木の神よ。あなたのやわらかい肉を出してくれたら、あなたをきれいな舟ふねにして交易にだけ、お酒やいろいろな品物ものであなたのふところをいっぱいにしてさしあげます」といった。それを聞いて、私はかたい肉を引っこめて、やわらかい肉を出して切られてやった。(語り・杉村キナラブック)

2. アイヌ民族の歴史

歴史の学習のはじめに

アイヌ文化を学びはじめた人から、よく出る質問があります。

かつて、アイヌ民族は、北海道・千島列島・サハリン・東北地方に住んでいました。

この本では、北海道のアイヌ民族が中心になります。

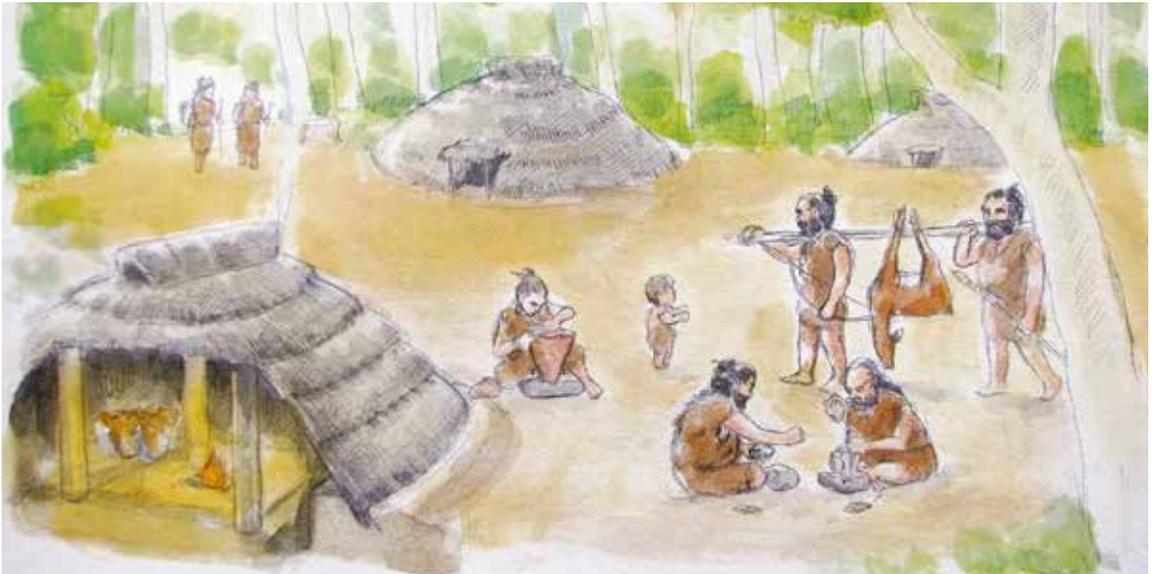
いつ事件が起きたかは、西暦を使います。

たとえば、アイヌの人たちと和人の大きな戦い、シヤクシャインの戦いは1669年に起きました。

- ① アイヌの人たちは、日本語を話せますか。
- ② アイヌの人たちは、今も、サケやシカをとって生活しているのですか。

これは、けっして、ふまじめな気持ちから出たものではなく、あまりにも「今のアイヌ民族」のことを知らないことから出た質問なのです。この質問は、和人に「今も、チョンマゲの頭で、刀を差して生活していますか」と聞くようなもののなのです。

みなさんには、アイヌ民族の歴史を学んで、この質問に答えられるようになってほしいのです。なぜ、アイヌの人たちがアイヌ語ではなく、日本語を話すのか。なぜ、アイヌの人たちは、サケやシカをとる生活をやめたのか。なぜ、今、アイヌ語やアイヌ文化を守り、広げようとしているのか。そして、アイヌの歴史を学ぶことで、アイヌ民族と和人がともに生きていく世の中を考えてほしいのです。



北海道の縄文時代の想像図 ～上の図からどういう生活がわかるだろうか

1 縄文文化からアイヌ文化へ

北海道では、1万年あまり前から2千年ほど前までを、縄文時代と言います。

縄文時代の人たちは、アイヌ民族の祖先そせんと言われています。狩りや漁、採集さいしゅうの生活をしていました。石（石器）やほねで作った道具を使って、海や陸の動物をとりました。食べ物は、ねんどを焼いて固めた入れ物（土器）に入れました。土器は、食べ物を煮る鍋や、皿にしました。

縄文文化から、
アイヌ文化へかわったところと、
かわらなかつたところ
を調べてみよう。



はってん

石器や土器はどういうものか、図鑑で調べましょう。

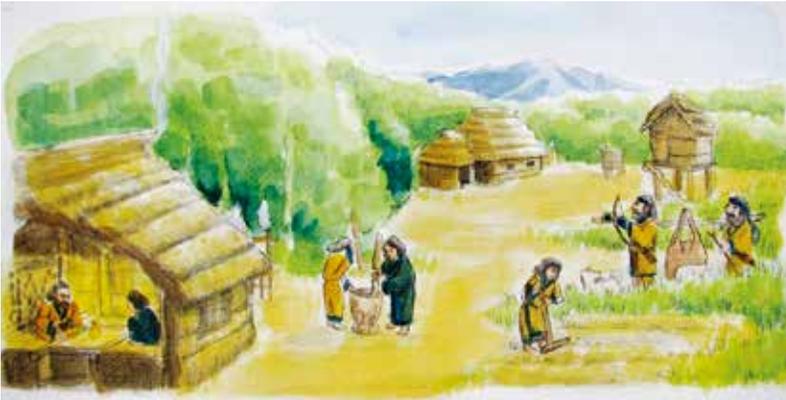


弥生時代の想像図

1500年ほど前から800年ほど前を、^{さつもん}擦文時代と言います。このころ、奈良や京都には、和人の政府ができ、本州・四国・九州で領土^{りょうど}を広げていきました。擦文時代の人たちは、和人から鉄を手に入れ、だんだん石器を使わなくなりました。

かんがえよう

縄文時代と擦文時代の想像図をくらべ、わかることは何だろうか

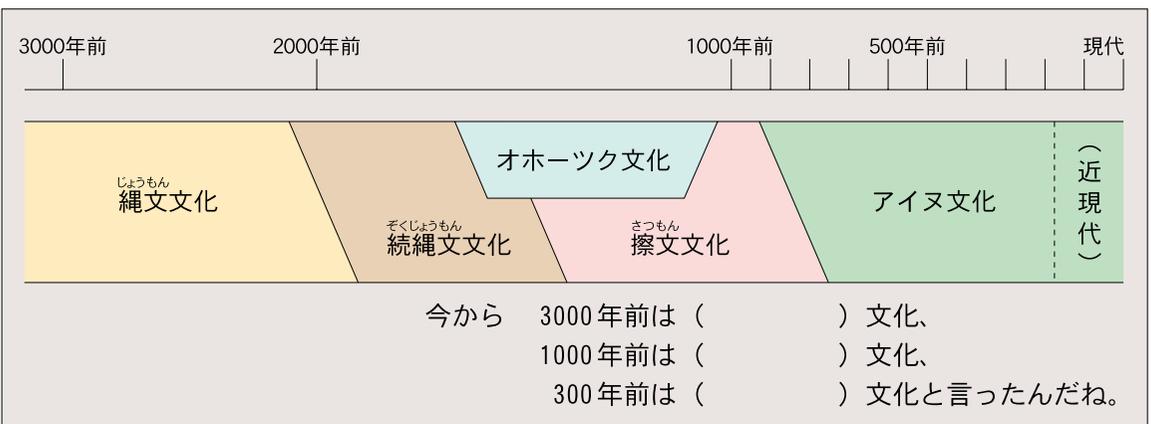


アイヌ文化の時代の想像図

今から、800年ほど前から百数十年前までを、アイヌ文化の時代と言います。狩りや漁、採集の生活をしていましたが、石器も土器も使わなくなりました。かわりに、和人からいろいろなものを手に入れました。

かんがえよう

前の時代とアイヌ文化の想像図をくらべ、わかることは何だろうか



1000 1200 1400 1600 1800 2000

縄文 アイヌ文化 (近現代)



写真2-1:シノリ館(函館)の近くで見つかった37万枚のお金 だれがあつめたのだろうか

北海道アイヌの人たちはどこまで出かけたかな
北海道から線をひこう

アイヌの人々が
交易に出かけたところと、
こうかんしたものを
調べてみよう。



2 コシャマインの戦い

今から800年から400年ほど前、アイヌの人たちは、まわりに住む人々(サハリン、千島列島、本州)のところへ、狩りや漁でとったものを持って行き、交易していました。

千島列島では、ラッコの毛皮を手に入れました。アジア大陸からは、「えぞにしき」という中国製の服を手に入れました。そして、本州の北部では、お米や服と交かんしました。

このころのアイヌの人たちは、だれからも命令されることなく、自分たちの意志で、自由に交易していたのです。

同じころ、和人たちが北海道の南部に移り住

ことば

交易

物と物を交かんすることをいいます。

はってん

アイヌの人たちはどんな船に乗ったのかな。(p.43)

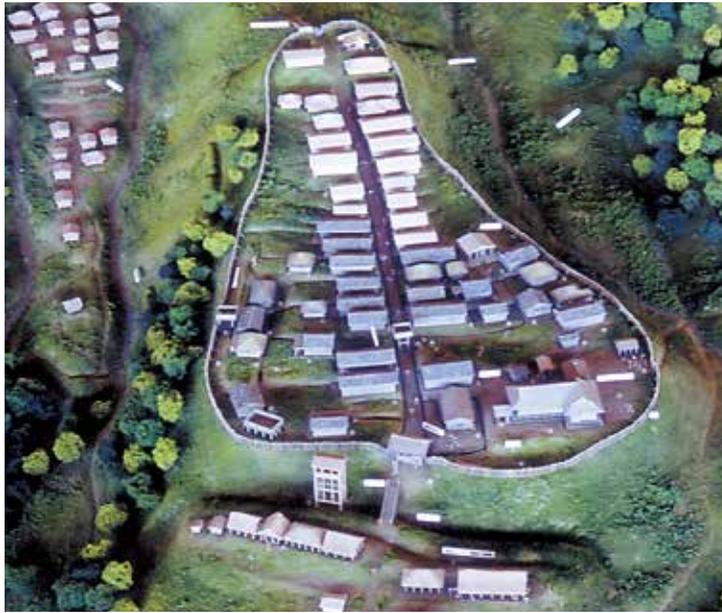


写真2-2：上ノ国の勝山館の復元模型

みはじめました。北海道でとれるサケやコンブが売れるので、それを求めてきたのです。また、本州の北部での戦いに敗れたさむらいが、北海道に逃げることもありました。

そのためにアイヌの人たちの土地だった、ヨイチからムカワのあたりにまで、和人が住むようになったのです。

そういう時、志苔（函館市）でアイヌの少年が和人の鍛冶屋に殺されるという事件がおきたのです。この事件がきっかけとなって、コシャマインをリーダーとするアイヌの人たちと、和人との間で戦いがはじまりました。

この戦いで、12あった和人の館のうち、10の館がおちましたが、コシャマインは戦死しました（1457年）。この戦いの後、数十年の間、和人の住むところは松前や上ノ国だけになりました。

コシャマインの戦いで
おちた10の館

し のり ほこだて なかの おきもと
志苔・箱館・中野・脇本・
いんない およべ まつまえ ねぼた
穂内・葦部・松前・祢保田
・原口・比石

のこった館

もべつ かみのくに
茂別・上ノ国（花沢館）

アイヌの人々と
和人の住むばしょの
へんかを調べて
みましょう。



ヨイチからムカワってどこかな。23ページの地図に線をひこう。

かんがえよう

先に住んでいたアイヌの人たちはどう思っただろうか。

ことば

なて
館

館とは和人のさむらいが作ったお城に似たものです。

コシャマインの戦いによっておちた10の館の場所はどこかな。23ページの地図に×印をつけよう。

松前、上ノ国はどこかな。23ページの地図に線をひこう。



写真2-3：シベチャリのチャシ（磐）
シャクシャインがいた磐。磐はどういうところにたてられた
のだろうか。

太平洋がわ	日本海がわ
シラオイ	オタスツ
シコツ	イソヤ
ミツイシ	シリブカ
ホロベツ	フルビラ
ホロイツミ	ヨイチ
トカチ	シクズシ
オンベツ	マシケ
シラヌカ	

アイヌの人たちと和人が戦った
ところ

戦いのあったところはど
こかな。23ページの地図に
×印をつけよう。



アイヌの人たちと
和人の交易がどのように
変わったか、
調べてみましょう。

3 シャクシャインの戦い

まつまえ かみのくに
松前や上ノ国など、和人の住んでいたところ
を和入地と呼んでいます。ここを治めていたの
は松前氏です。

1630年ころから、松前氏のゆるしをもらった
家来（さむらい）は、海岸のアイヌの人たちの
住む村で、物と物を交かんするようになりました。
この交易でもうけた分がさむらいたちの給
料になったのです。

しだいに、さむらいたちはもうけを大きくし
ようと、交易の条件を、次のように変えていき
ました。

かんがえよう

本州や松前に行っていた、
アイヌの人たちの自由な交易
は、どうなったのだろうか。

お米が10kg入ったふく
ろはあるかな。サケは大き
くなると70cmをこえます。
そのサケが100本。

どうい交かんか、そう
ぞうしてみよう。

- ◎ 1641年ころ
アイヌのサケ100ぴきと、和人の米30kg
くらいを交かん
- ◎ 1669年ころ
アイヌのサケ100ぴきと、和人の米10kg
くらいを交かん



写真2-4：交易するための物を持って松前城に行くアイヌの首長。
戦いのあと、どうい関係になったのだろうか。

そのほか、和人の砂金ほりや、鷹たかをとる人が、アイヌの人たちの村に入ってくるようになりました。

こうしたことが重なり、アイヌの人たちの不満は高まりました。1669年、シャクシャインをリーダーとするアイヌの人たちの戦いがはじまりました。この戦いは、結局、松前のさむらいが勝ちました。そして、「戦いをやめる話し合いにこないか」とシャクシャインを呼び出し、だましうちにしました。

その後、松前のさむらいはアイヌの人たちから刀を取り上げ、「松前の言うとおりにする」と誓ちかうことを強きょうせい制しました。また、交かんの条件は

アイヌの生サケ100ぴきと、和人の米20kg
くらいを交かん

というようになりました。

このころ、ウス山やタルマエ山がふん火しました。これもアイヌの人たちの生活を苦しめたかもしれません。

かんがえよう

アイヌの人たちの生活はどのように変わったかな。

鷹をどうしてとったのか？
⇒さむらいが鷹がりをするために、北海道の鷹をとった。

人物しょうかい

シャクシャインは、シベチャリ（静内）の首長でした。松前を攻めるため、仲間をあつめました。そして、その仲間は、クヌイ（長万部おしやまんべ）で戦いました。

かんがえよう

どうして、こういう交かんになったのだろうか。



写真 2-5：1792年に根室にきたロシア船
アイヌの人たちは、ロシア船を見てどう思
っただろうか。

メナシ地方	クナシリ地方
ウエンベツ	フルカマップ
サキムイ	トウフツ
クンネベツ	ヘトカ
コタヌカ	
チウルイ	
シベツ	

クナシリ・メナシの戦いで和人がおそわれたところ

戦いのあったところはど
こかな。23ページの地図に
×印をつけよう

4 クナシリ・メナシの戦い

1600年代、北海道の東部のアイヌの人たちは、千島列島でラッコをとって、交易のために松前へ持って行きました。

また、アッケシに住むアイヌの人たちは、狩りをしに、千島列島のさらに北にある、カムチャツカ半島まで出かけました。

ところがアジア大陸の北では、ロシア人が探検に入り、領土を増やしていました。新しく領土にすることによって、そこに住む人たちから毛皮を手に入れようとしたのです。1700年ころには、ロシア人はカムチャツカ半島までやって来るようになりました。カムチャツカの人たちははげしく抵抗しましたが、ロシア人はさらに千島列島にまでやって来ました。

1771年、アイヌの人たちとロシア人が、ウルップ島で戦いになりました。その結果、ロシア人はウルップ島から先には進みませんでした。

ところが、こんどは和人の商人がやって来る

クナシリ・メナシのアイヌの人たちが、和人やロシア人のやって来た時にどう行動したか、調べましょう。



はってん

アッケシからカムチャツカ半島まで、どうい島々をとるか調べよう。(p.7)

1600年代、ラッコの皮はアザラシの皮の10倍以上の値段で売れた。

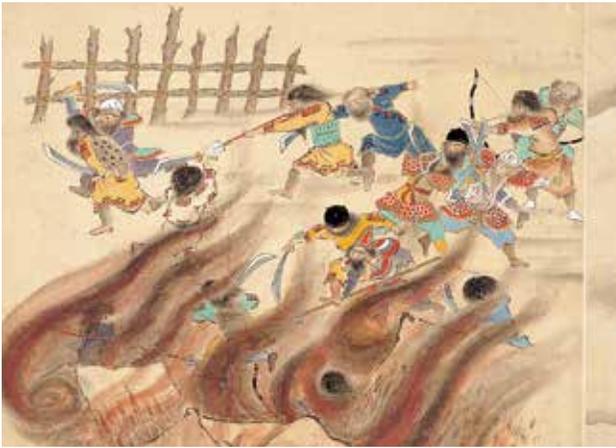


写真2-6：アイヌの人たちの戦いのようす
アイヌの人たちはどういう武器で戦ったのだろうか。



写真2-7：ツキノエ
松前で着せられた服装です。くつや服はどのものかな。

ようになりました。シャクシャインの戦いのころは、松前のさむらいがアイヌの人たちの村で、交易をしていました。ところが、このころには、松前のさむらいにかわって、商人がやって来るようになっていたのです。クナシリ島の首長・ツキノエは、商人との交易をことわり続けますが、それも数年しかもちませんでした。

クナシリ島に来た商人は、アイヌの人たちに魚かすを作る仕事をさせました。それはとてもひどい仕事で、給料はほんのわずかで、「言うことをきかなければ殺す」とおどし、どくをのませることさえありました。追いつめられたクナシリ・メナシ地方のアイヌの人たちは立ち上がり、和人71人を殺害しました（1789年）。しかし、アイヌの長老たちは、戦いを中止するように説得し、立ち上がった人たちもそれにしたがいしました。それにもかかわらず、松前のさむらいは強い態度でのぞみ、37人のアイヌの人たちを死刑にしてしまいました。

かんがえよう

ロシア人と和人がやって来たことで、アイヌの人たちの交易はどうなっただろうか。

かんがえよう

松前のさむらいと商人では、アイヌの人たちに対する接し方にどのような違いがあっただろうか。

かんがえよう

アイヌの長老たちはなぜ話し合いするよう説得したのだろうか。



写真2-8：ニシン漁のようす
だが、アイヌの人たちを働かせたのか。



写真2-9：天然痘の予防接種よぼうせつしゅをしているようす

アイヌのニシン漁は、
どのように変えたか
調べてみよう。



5 漁場ではたらくかげで

かつて、北海道の日本海沿岸では、たくさんのニシンがとれていました。松前のさむらいに交易をまかされた和人の商人は、アイヌの人たちの村に行って、ニシンを買いました。

しかし、1700年代の半ばから、本州でニシンが肥料なかに使われるようになると、商人はもっとたくさんのニシンを手に入れたいと考えようになりました。

そこで、商人はアイヌの人たちを働かせて、ニシン漁をするようになりました。さらに、出かせぎの和人を、アイヌの人たちの村につれて来て、早春から夏にかけて、ニシン漁をさせるようにもなりました。

次の文は、1800年代の半ばころ、北海道を探検まつうらたけしろうした、松浦武四郎という人が書いた文です。

太平洋岸の日高のサルには…、家が300けん、

西日本では、わたなどを作るときに肥料にニシンかすがよいことがわかって、北海道のニシンが高く売れました。

かんがえよう

出かせぎの和人が来て、アイヌの人たちの生活はどうなっただろうか。

1870年ころの北海道の区わり

アイヌの人たちの人口がへったところ

	1804年	1854年
後志	2,871人	1,577人
石狩・天塩	3,120人	1,613人
釧路	2,138人	1,515人
根室	1,370人	581人
千島	1,765人	602人

※1870年ころの地図にあてはめて人数を表したもの



人口がへったところは、どこですか。
そこで何があったのだろうか。

アイヌの人たちの中には、自分でニシン漁をして和人と交易する人もいました。

23
から
線
を
引
こ
う。
ど
こ
に
行
か
さ
れ
た
か、
沙
流
の
アイ
ヌ
は



かんがえよう

おとなの男の人が出かせぎ
に行くことを、家族はどう思
っただろうか。

人物しょうかい

松浦武一郎はアイヌの人た
ちにひどい仕事をさせる和人
の商人、漁師に強いいかりを
持ちました。

1780年には、イシカリ
地方で天然痘が流行して
647人がなくなりました。

ことば

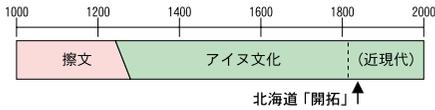
天然痘

高い熱と、皮ふにふきでも
のが出る病気です。この病気
で、たくさんの方がなくな
りました。

人口が1,300人あまりもいる。ここの商人はアイヌの人たちを、アッケシ、イシカリ、アツタ、オタルナイなどに行かせ、出かせぎに使った。その働かせかたは、とてもひどく、そこにやられたら、1年で帰れるのか、2・3年で帰れるのかわからない。…このため、親せきの人々は一生の別れのように泣きかなしむ。

アイヌの人たちは、たいへんな仕事をさせられただけではありませんでした。多くの和人がやって来たことによって、天然痘てんねんとうという、それまでアイヌの人たちの生活にはなかった病気が流行し、たくさんの方が亡くなったのです。

アイヌの人たちの人口が一番へったのがこのころです。



西暦	1400	1500	1600	1700	1800	1900	2000
人名	コシャマイン	ショヤコウシ兄弟 タナサカシ	タリコナ ヘナウケ	オニビシ シヤクシヤイン	ハウカセ ツキノエ	イコトイ シヨンコ	ヤエンクル 山辺安之助 <small>やまべやすのすけ</small> 武隈徳三郎 <small>たけくまとくさぶろう</small> 知里幸恵 <small>ちりゆきえ</small> 達星北斗 <small>たっしほくと</small> 萱野茂 <small>かやのしげる</small>

1400年代から現代までの、アイヌの人たちの名前
2つの時代に分けるなら、どこで分けられるか。どうして、このように変わったのだろうか。



北海道は、松浦武四郎が
名付けた。北海道の「カイ」
は、アイヌ民族を指しま
す。

6 北海道の「開拓」とアイヌ民族

1850年ころ、北海道のほとんどの場所に、アイヌの人たちが住んでいました。しかし、1869年に日本政府は、この島を「北海道」と呼ぶように決め、アイヌの人たちにことわりなく、一方的に日本の一部にしました。そして、アイヌ民族を日本国民だとしたのです。しかし、日本の国はアイヌ民族を「旧土人きゅうどじん」と呼び、差別し続けました。

日本の国は新しいきまりを作
って北海道を「自分の土地」と
して、使いはじめました。原始
林を切り開いて、町や道路、港
をつくり、汽車を走らせたので
す。これを北海道の「開拓」と
言っています。

1877年に作った「北海道地券
発行条例」で

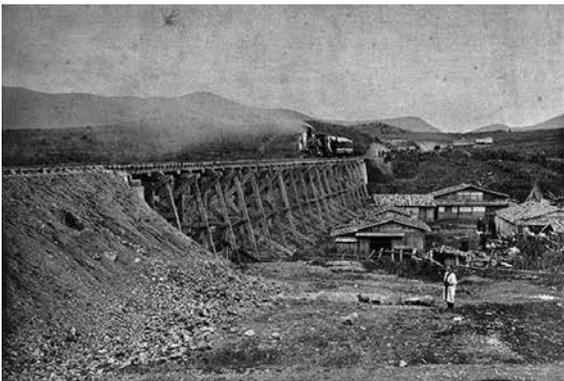


写真2-10：手宮（小樽）～札幌に汽車が走った
アイヌの人たちはどう思っただろうか。

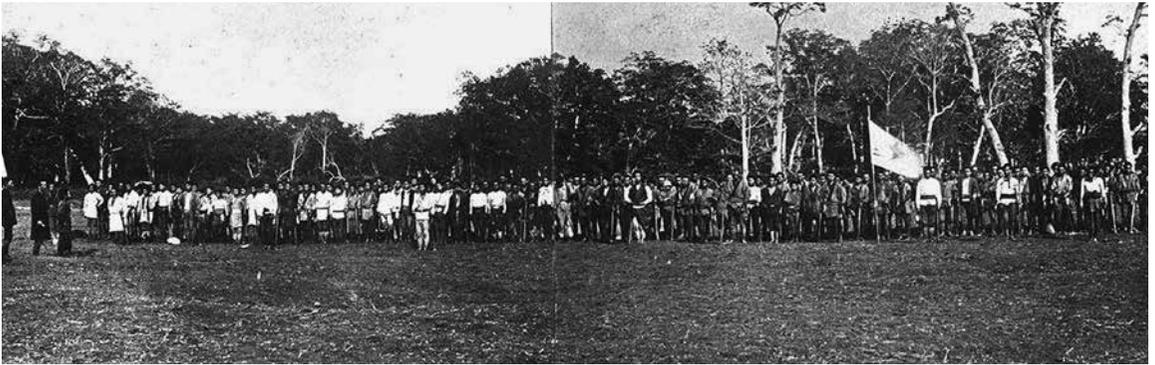


写真2-11：琴似（札幌）に来て住みはじめた和人
アイヌの人たちはどう生活したのだろうか。

アイヌの人たちが住むところは、いろいろ
な事情じじょうに関係なく、しばらくの間、すべて
官有地に入れます。

と決めました。このきまりで、アイヌの人たちは、それまで住んでいた土地も取り上げられたのです。そして、その土地は和人にあたえられていきました。

また、それまでの、アイヌの人たちの文化や
習慣しゅうかんに対して「やってはいけない」「変えなさい」と命令したものがいくつもあります。

- ◆ イレズミをしてはいけない
- ◆ 耳かざりをしてはいけない
- ◆ 川でサケを取ってはいけない
- ◆ 和人風の名前に変えなさい

そして、狩りや漁が中心の生活を、農業中心の生活に変えて、日本語を使うようにと言いました。「和人と同じような生活をどうかせいさくしなさい」ということです。これを「同化政策」と言います。

はってん

ヨーロッパの国々は、500年ほど前から、アメリカ大陸、オーストラリア大陸などの昔から住んでいた人々の土地に入り込み、自分の国の一部にしていました。

～先住民族 (p. 41)

はってん

その後、沖縄も台湾もサハリン（樺太）も日本の一部にされた。

北海道「開拓」って何だろうか。

ことば

官有地
日本の国の土地のことです。

かんがえよう

アイヌの人たちの生活で、変えられたことをまとめよう。
また、変えられたことを、アイヌの人たちがどう思ったかをそうぞうしよう。

アイヌの女性は、くちびるのまわりや手にイレズミを入れました。これは「もう、おとなですよ」ということをあらわしていました。

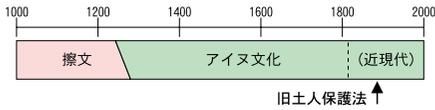


写真2-12：北見の上斜里の開こん
原始林は開こんされ、畑にかえられていった。



写真2-13：新冠御料牧場
この牧場を作るために、ここにいたアイヌの人たちの一部は、平取に強制的に移された。

7 北海道旧土人保護法

日本の国が行った北海道「開拓」^{かいたく}によって、北海道に和人がどんどん移り住むようになりました。鉄道や道路がたくさん作られ、住みやすくなったからです。しかし、和人にとっても原始林を切り開き、道路を作る仕事はたいへんなものでした。そこで、空知^{そらち}や樺戸^{かばと}や釧路^{くしろ}にあった刑務所^{けいむしょ}にいる囚人^{しゅうじん}たちを働かせることもありました。

和人の人口が増えると、アイヌの人たちの生活が苦しくなりました。それまで、アイヌの人たちはサケやシカを食料としていましたが、そのサケ漁^{きんし}が禁止^{りょう}され、シカ^{シカ}もやりにくくなったからです。

1880年ころには、多くの和人のハンターがシカ^{シカ}をして、シカをとりすぎたり、大雪でシカが死んでしまったため、シカが急に減ってしまいました。このころには、サケ漁も禁止されていたこともあって、アイヌの人たちは、狩り^かや



囚人の中には、国の方針に反対で、とらえられた人もいました。囚人たちは、むりな仕事をさせられ、たくさんの人が亡くなりました。

かんがえよう

アイヌの人たちは和人のハンターをどのように思っていたのかな。



写真2-14：北海道の役所が行ったアイヌの調査
 どうして、役所がアイヌの人たちの生活を調べたの
 だろうか。



写真2-15：1877年ころのアイヌの生活
 アイヌの生活で、気が付くことは何だろうか。

漁の生活では生きていけなくなりました。

そこで政府は、アイヌの人たちを「助けよう」
ほっかいどうきゅう どじん ほ ごほう
 と、「北海道旧土人保護法」を作りました(1899
 年)。その第1条は、次のようなものです。

北海道のアイヌで、農業をする者には…土
 地をただであたえる。

アイヌ民族を「助ける」と言っても、ずっと
 続けてきた狩りや漁が中心の生活から、農業中
 心の生活に変えさせようというものだったので
 す。しかし、「ただであたえる」と言った土地
 が畑に向かないところだったり、急に農業をし
 ようとしても、うまくできなかつたため、土地
 を取り上げられることもありました。

アイヌの子どもたちは、学校でアイヌ語では
 なく、日本語を教えられました。また、アイヌ
 の人たちの人口の多いところでは、和人の子ど
 もの学校とは別に、アイヌの子どもだけが行く
 「学校」が作られました。その後、和人の子ど
 もが学校へ行く年数は6年間に伸びましたが、
 アイヌの子どもは4年間のままでした。

かんがえよう

農業をする人だけを「助け
 よう」としたのは、どうして
 だろう。

かんがえよう

アイヌの子どもだけが行く
 学校では、国語(日本語)と修
 身(道徳)に力を入れました。

アイヌの子どもに、日本語
 を教えたのはどうしてだろう
 か。

修身では、何を教えたのだ
 ろうか。

アイヌの人たちにあたえ
 られた畑は、和人にくらべ
 てずっとせまかった。

かんがえよう

今から考えると、このとき
 どういう法律を作っていれば
 よかつたのだろうか。

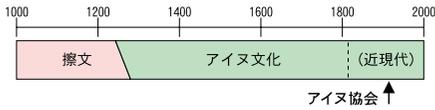


写真2-16：『コタン』達星斗

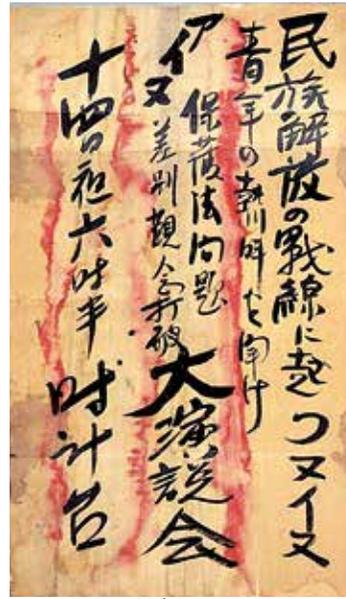


写真2-17：演説会のポスター
何が書かれているだろうか

8 アイヌ協会を作る

北海道にはたくさんの和人が移り住みました。そして、町や港や道路をどんどん作っていききました。そのことによって、アイヌ民族は、生活や習慣を変えられ、名前も和人風の名前に変えられていきました。

アイヌ協会は、
どのようにして作られ、
どういう仕事をしたか、
調べましょう。



ことば

アイヌ神謡集

『アイヌ神謡集』は、アイヌの手でアイヌの物語を集めた初めての本です。

神謡とは、動物などの神々を主人公にした物語です。

おお ほろびゆくもの …それは今の私たちの名。なんといふかなしい名前を私たちは持っているのでしょう。…

はげしい競争に敗れた 今の私たちの中からも、いつかは二人でも三人でも（強いものが）出てきたら、進んでいく世と歩みをならべる日も、やがては来ましょう。

(1923年『アイヌ神謡集』)

これは、知里幸恵という、アイヌの女性が書いた文です。

(アイヌの子どもである)私は、小学校六年生の夏、一歳の妹をせおって、近所の川に魚つりに行きました。…急に草やぶの中から…子どもたちの声をするやいなや、ばらばらと石がとんできました。…せなかの赤ちゃんは「ぎゃっ」と声をあげたまま、ぐったりしました。…頭から血が流れ、赤ちゃんは白目をむいています。

(『南北の塔』)

アイヌの子どもと、和人の子どもがいっしょの学校に行くと、どういう問題が起きたのだろうか。

知里幸恵の本が出てまもなく、アイヌ民族の中から「バラバラではやっていけない。いっしょになって行動していこう」と考える人が出てきました。そして、余市の^{よいち}違星^{いぼしほくと}北斗^{まくべつ}、幕別の^{よし}吉田^{だきくたろう}菊太郎という人たちが中心になって仲間を集め、1931年に北海道アイヌ協会を作りました。北海道アイヌ協会は、アイヌ民族全体のために、世の中を変えていこうという^{しゅちょう}主張をしました。

アイヌ民族は、農業を行う者だけではなく、漁業などを行う者にも力を^か貸してほしい、アイヌの子どもも和人の子どもと同じ学校に行かせてほしいとうったえたのです。こうしたうったえは、政府を動かす、1937年に「北海道^{ほっかいどうきゅう}旧土人^{どじん}保護^ほ法^{ぽう}」の一部が変えられました。

アイヌ民族は「旧土人」として、政府からも差別されていましたが、和人と同じように「日本国民」になっていたのも、アジア・太平洋戦争にかり出されました。

かんがえよう

アイヌ民族は何を変えようとしたのだろうか。

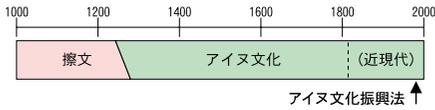
違星北斗の短歌です。

何を感じるか。

^{ほろ}減び行く
アイヌのために
^た起つアイヌ
違星北斗の
ひとみかがやく

旭川では

旭川の^{ちかぶみ}近文の土地をうばおうとする和人、旭川市と、アイヌの人たちがはげしく対立しました。



一部の学者は研究のために「アイヌの人たちの墓をほり起して骨を持ちさる。アイヌの人たちの血液を採る。」ということまで行った。どういう考え方で研究が行われたのだろうか。

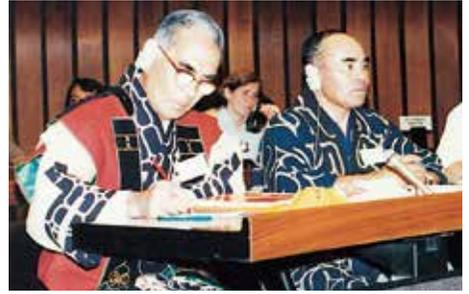


写真2—18：国際連合の会議に出席するアイヌ民族の代表
なぜ、アイヌ民族の服を着ているのだろうか。

9 先住民族として

こぼれ話

このころ、日本を占領した国から、日本から独立して、アイヌ民族の国を作らないかという話ができました。しかし、当時のアイヌ民族のリーダーたちは、「日本国民として生きる道を選んだ」ということが関係者の話から、伝えられています。

現在、アイヌ民族は、
どういう世の中を作っている
のでしょうか。



かんがえよう

しゅう職について、自分の感想を教えてください。なぜ、差別はおこるのだろうか。

1945年、日本はアジア・太平洋戦争に敗れました。そして、「平和で、国民一人一人が大切にされる」新しい国のしくみがつくられました。

戦争が終わって間もない1946年に、北海道アイヌ協会も新しいしくみにしました（1961年北海道ウタリ協会に名前を変え、2009年北海道アイヌ協会に名前を変えています）。

しかし、日本という国で生きるためには「日本語を話し、和人と同じ生活をするのは当たり前」（同化）というふんいきの中で、アイヌ民族への差別はなくなりませんでした。

ひどいものです。こんなに中学卒業生の求人が多く困っているのに、アイヌの少年少女となると、しゅう職が思うようにはかないんです。…アイヌの娘さんが一次試験では合格したのに、面接試験でアイヌとわかって不合格になったんです。

(役所の人のお話 1960年代)



写真2-19：アイヌ民族文化祭で発表されたアイヌ語の劇（様似アイヌ協会）
アイヌ民族はアイヌ語やアイヌ文化をとりもどそうととりくんでいる。

そのころのアイヌの人たちは、和人と同じように生きていける世の中をめざして、活動していました。

1980年代になると、世界の先住民族が国際連合こくさいれんごうに集まって、次のうったえをしました。

- ① 先住民族の土地や資源しげんをとりもどす。
- ② 昔から守ってきた文化を守り、はってんさせる。
- ③ 政治の場で意見を言う。

アイヌ民族も先住民族の仲間として、同じうったえをしました。また、「日本には、昔から和人たんにつしかいない」（日本単一民族）というまちがった意見には、抗議こうぎしてきました。アイヌ民族のうったえによって1997年に②だけは「アイヌ文化振興法ぶんか しんこうほう」とよばれる法律ほうりつになりました。

私たちは、アイヌ民族も和人も、共に生きていく世の中をこれからも考えなければなりません。



写真2-20：アイヌ語ラジオ講座のテキスト

ことば

先住民族とは、ある土地に先に住んでいた民族で、あとからきた別の民族に、土地や文化がうばわれていった民族のことです。

オーストラリアのアボリジニ、ニュージーランドのマオリなどが知られています。

アイヌ文化振興法の正しい名前は『アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律』という。

かんがえよう

アイヌ民族と和人がともに生きていくためには、どういうことをしていかなければいけないのだろうか。



写真3-1：川をのぼるサケのむれ



写真3-2：アシリチェップノミ
豊平川で行われた新しいサケをむかえる儀式。

3. アイヌ民族の文化と現代社会

よみがえるいろいろな儀式

札幌市の豊平川で行われた新しいサケをむかえる儀式や、なくなった先ぞにそなえ物をして供養をする儀式なども、他の地域に広がっています。

儀式の中で最も重要な『クマのれい送り』が北海道の平取、白老、旭川などで行われたり、弟子屈の屈斜路湖はんで、『シマフクロウのれい送り』も行われました。

1 いろいろな文化が共に生きる社会に

私たちの国に一番多く住んでいるのは和人で、ちがう言葉や文化・^{しゅうかん}習慣などを持った人たちも、たくさん住んでいます。

それらの人は一生の中で、^{たんじょう}誕生・^{せいじょう}成長・^し死といった、大切なできごとについての^{ぎしき}儀式、季節や信こうから来るいろいろな行事を、それぞれの考え方で行っています。

昔のアイヌの人たちは、そ先から伝わる方法で^{ちいき}地域や家庭で自分たちの儀式や行事を行っていました。

しかし、長く続いた国の「同化政策」のために言葉や文化が受けつがれなくなり、儀式や行事を行うことは、少なくなっていました。

しかし、1980年代から、いろいろな儀式や文化を再びよみがえらせようと運動するアイヌの人たちが増えてきました。そこにアイヌ民族以外の人たちも加わって、その運動はさらにもり上がるようになりました。



写真3-3：1955年の通達で、イオマンテは「やばん」という理由で、一方的に禁止されていました。しかし、2007年に国がイオマンテは「動物を使った正式な儀式」に当たり法的に問題はないという見解を示した。アイヌの人たちの長年の要求が認められたのである（北海道新聞2007.4.28付）。



写真3-4：東京で行われているアイヌ語講座
アイヌ語教室は各地で活発に開かれています。



写真3-5：イタオマチヤ（板つづり舟）
海での漁や物の交かんに使った舟です。波よけのための板は、鉄のくぎを使わずにナワでつづられています。

アイヌの人たちが、そ先から伝わる民族の言葉を話せるようになろうと全国各地で開いている「アイヌ語教室」や、民族衣しょう、楽器、料理、民具、小物作りなどの「体験教室」には、アイヌ民族以外の人たちもたくさん参加して活発な活動をくりひろげています。

また、各地のいろいろな人が関って昔のアイヌの人たちの家や舟、衣服などを復元(元と同じように作ること)したり、伝統的な方法でサケやシカなどの^{りょう}猟をする行事なども行われています。

さらに、アイヌ文化の伝統を受けつぎ大切にしながら、さまざまな文化を取り入れた新しい形のおどりや音楽、美術^{びじゅつ}作品を作って発表するアイヌの人たちが続々とあらわれ、和人もいっしょに活動しています。

そうしたことが重なって、アイヌ民族の文化や芸術^{げいじゅつ}に関心を持ったり、親しみを感じる人がだんだんふえ、アイヌの料理を楽しんだり、身の回りの小物や衣服にアイヌもようのししゅうを入れたり、民芸品をアクセサリとして身に付けるなど、それらをくらしの中に生かす人も出てきました。



写真3-6：かつてアイヌの人たちが大切な食料にしていたシカ肉を使った料理



写真3-7：ティッシュペーパーカバーや手提げ袋など、ふだん使うものにもアイヌのししゅうがほどこされています。下はアイヌもようを入れたベストを着る若者。



写真3-8：「異文化への理解」と「自然との共生」をテーマに国内外で活動するアイヌ詞曲舞蹈団・モシリ



写真3-9：「先ぞが残した豊かな文化を受けつぎ、自分で考え・思う活動」を行っているアイヌ・アート・プロジェクト



写真3-10：文様Ⅱ（川村則子・作）



写真3-11：カムイ ピリマ（結城幸司・作）
 版画の世界にも、アイヌ民族の心が取り入れられています。

1997年に『アイヌ文化振興法』という法律ができたことにより、学校や地域にアイヌ文化がより広く知られるようになりました。

また、アイヌ文化を受けつぎ残し発てんさせるための活動にも、国などが積極的に補助することになりました。

そのため、伝統的なおどりや歌、アイヌ語などを受けついでいこうという人がふえ、その活動はより活発になりました。

しかし、現在のこのような活動ができるのも、アイヌ民族の文化が和人によって禁止されるという、長く苦しい時代を乗り越えて伝統の文化を受けついできた、アイヌのおじいさんやおばあさんたちがいたからだということを、決して忘れてはいけません。

さまざまな国や地域には、いろいろな民族がいるのはごく自然なことで、そこに住む人たちが共に生き、仲良く、豊かになっていくためには、それぞれの国や地域の歴史と文化を『尊重し理解し合う』ことがとても大切です。



写真3-12：民族文化の交流をめざして

日本にはいろいろな民族が住んでおり、それぞれに違う文化をもっています。「チャランケ祭」(チャランケ：アイヌ語で「話し合う」という意味)は、アイヌや琉球など日本に住むいろいろな民族が、芸術・文化の交流を通しておたがいを理解し合うことを目的に、1994年から東京都にあるJR中野駅北口広場で開かれています。

左の写真は、参加者によるリムセ(輪おどり)です。アイヌの人たちだけではなく、集まったたくさんの人たちがいっしょにおどっています。

2 アイヌ文化の精神を今に生かす

これまで見てきたように、アイヌ民族の歴史や文化は遠い昔のものではなく、今も私たちのすぐそばにあって息づいています。

日本の文化も、古い時代から中国や朝鮮といったアジアの国々をはじめ、ヨーロッパの国々からたくさんの文化を取り入れて発てんしてきました。

21世紀をむかえた現在、その時代とは比べものにならないほど日本の社会は豊かになりました。しかし、その一方で、人と人の結び付きが弱くなったり、自然環境が破壊されたり、戦争や貧し^{まず}さに対する不安といった大きな問題が起きています。

このような時代の中で人びとは、だんだんと明らかにされてきたアイヌ民族のものの考え方や生き方にふれ、これから生活していく上で「学ぶものがたくさんあるのではないか」と考えるようになりました。

そこで、アイヌの人たちの、自然や社会への接し方、アイヌ文化の精神^{せいしん}が今の時代に必要とされているわけをいっしょに考えてみましょう。



イオル計画とは？

イオルとは、アイヌ語の「イウォロ」(かりをする時の自分たちの場などという意味)からきています。

『イオル計画』は、アイヌの人たちの生活を支えた森や水辺などを中心とした自然環境を再び作り出すとともに、アイヌ民族の伝統文化を受けついでいく場を作ろうというものです。

そこでくり広げられるアイヌ文化が、日本という国の文化をさらに豊かにするものとして期待されています。

イオルの再生は、北海道内の6地域(白老・平取・札幌・新ひだか・十勝・釧路)で進められており、他の地域においても、それぞれの地域に合った計画を実現するための研究や話し合いが行われています。



写真3-13：昔のアイヌの子どもたちの遊び

アイヌの子どもたちは、じょうぶな体をつくるために、小さい時はハダカで育てられました。

また、ブドウのつるで作った輪にぼうを投げ通したり、シカににせて作ったアシのたばを引っぱってはやく走ったり、それを弓でうったりする遊びの中で、将来の狩りや漁の仕方を学びました。

赤ちゃんはカムイ？

アイヌの社会では、「赤ちゃんは親だけではなく、コタン（村）みんなで育てるもの」という考えがあります。

また、赤ちゃんのうちはカムイ（神）としてやりたいようにさせ、赤ちゃんの願いをかなえてやるのが大人役目でした。

しかし、言葉をおぼえはじめる年になったら、きびしくしつけを始めたと言われています。



昔のアイヌの社会では、生まれたばかりの赤ちゃんには名前を付けず、わざときたないよき方でよんでいました。

それは、赤ちゃんに病気などの悪い神が近づかないようにするため、赤ちゃんの元気な成長を願ったものでした。（正式な名前は、子どもが5、6歳になったところに、その子にふさわしい名前がつけられました）

アイヌの人たちは、何よりも自分に付けられた名前を大切にしてくらしていたと言われていいます。

◎子どもやお年寄りが大切にされるアイヌの社会

アイヌの社会は、きびしい自然の中でくらししていたということもあり、人と人のつながりや助け合いは大変強いものでした。

狩りや漁のほかに、家を建てる時なども、村の人たちみんなが協力し合って仕事をしました。

子どもは「村の宝」として大切に、きびしく育てられました。お年よりはすぐれた知恵の持ち主として尊敬され大切にされました。

また、「村おさ」は話が上手で、勇気があって、狩りのじょうずな、外見も中身もどうどうとした人がみんなから選ばれました。親が「村おさ」だからといってその子どもが必ず「村おさ」になるとは限りませんでした。

◎物を大切にし、自然とともに生きるアイヌ民族

アイヌの人たちは、身の周りや自然にある多くのものを、カムイとしてうやまいました。

山菜をとる時も、根こそぎとるのではなく、次に来る時のために、いくらか残すということはおくふつうのことでした。

そして、くらしに必要なものは、身近にある材料を使って、「長く人々の役に立つように」

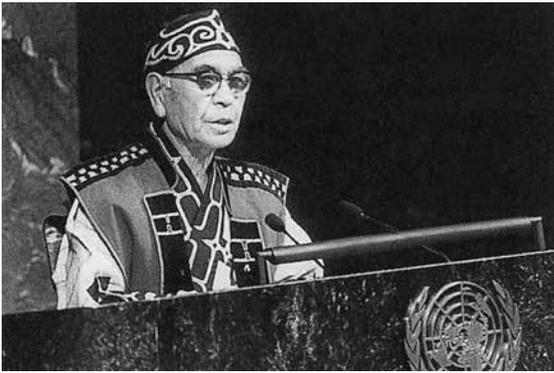


写真3-14：国連「世界の先住民の国際年」開幕式典で記念演説をするアイヌ民族の代表 ©UN Photo/E. Debebe

これまでアイヌ民族は、国連（国際連合という言い方を短くしたもの）という、世界の国々にの代表の人たちが集まって話し合う場で、毎年多くの先住民民族が集まって開かれる会議に参加したり、文化交流を深めたりしてきました。

そして、世界70カ国以上に少なくとも3億人はいるとされている『先住民』への差別を禁止し、民族の権利を守る運動にとりくんだ結果、2007年9月の国連総会で『先住民の権利に関する国連宣言』が採択されました。

と心をこめてていねいに作り、その作ったものも、カムイがすがたを変えたものだと考えて大切に使いました。

こうした生き方や考え方は、昔の日本にもありましたが、物や生き物をそまつにあつかうことの多い今の社会にあっては、よく考えて見ることも必要でしょう。

◎国をこえた交流の広がりこっきょうと争いの少ない社会

アイヌの人たちは、古くから国境をこえてまわりの国々に自由に行き来し、そこに住む人こうえきたちと交易ゆたをしたり、文化の交流をして豊かにくらししていました。

豊かな生活は、社会が平和でなければならぬというのが、アイヌの人たちの昔からの考え方でした。たとえ争い事がおきても、「十分な話し合いかいけつ」で解決し、力や戦争にうったえることは、やむをえない最後の方法でした。

よく「自然を守る」とか言われるけれど、アイヌ民族は反対に「人間は自然に守られている」と考えているのよ。



国境

国と国のさかいのこと
で、地図では国の領土をあらわす線が引かれています。

「話し合い」は、人間の持つ大切なちえ

アイヌの人たちは、争い事がおきると、ウコチャランケとよばれる話し合いをして問題をかいけつしました。

ウコチャランケは、ウコ（お互いに）チャ（言葉）とランケ（下ろす）という3つの語からできていて、言葉で争うという意味です。

アイヌの社会では、いくら時間がかかってもおたがいがわかり合うまで話し合いました。長い時は3日も4日もかかったそうです。

おわりに

私たちが毎日学習する目的は、アイヌ民族もふくめた世界中の民族の歴史と文化から、より良い生き方・考え方を見つけ出し、差別やまずしさ、争いのない平和で民主的な社会や世界を作ることにあることを、しっかりと学び取って欲しいと思います。

北海道内

国立アイヌ民族博物館

〒059-0902 白老町若草町2丁目3-1
TEL0144-82-3914

函館市北方民族資料館

〒040-0053 函館市末広町21-7
TEL0138-22-4128

北海道博物館

〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2
TEL011-898-0456

サッポロピリカコタン

〒061-2274 札幌市南区小金湯27
TEL011-596-5961

北海道立アイヌ総合センター

〒060-0002 札幌市中央区北2条西7丁目
TEL011-221-0462

昭和新山アイヌ記念館

〒052-0102 壮瞥町昭和新山
TEL0142-75-2053

のぼりべつクマ牧場・ユーカラの里

〒059-0551 登別市登別温泉町224
TEL0143-84-2225

名寄市北国博物館

〒096-0063 名寄市字緑丘222
TEL01654-3-2575

旭川市博物館

〒070-8003 旭川市神楽3条7丁目
TEL0166-69-2004

川村カ子ト アイヌ記念館

〒070-0825 旭川市北門町11丁目
TEL0166-51-2461

平取町立二風谷アイヌ文化博物館

〒055-0101 平取町二風谷55
TEL01457-2-2892

萱野茂二風谷アイヌ資料館

〒055-0101 平取町二風谷79-4
TEL01457-2-3215

帯広百年記念館

〒080-0846 帯広市緑ヶ丘2 緑ヶ丘公園内
TEL0155-24-5352

北海道立北方民族博物館

〒093-0042 網走市潮見309-1
TEL0152-45-3888

苫小牧市美術博物館

〒053-0011 苫小牧市末広町3-9-7
TEL0144-35-2550

新ひだか町アイヌ民俗資料館

〒056-0011 新ひだか町静内真歌7-1
TEL0146-43-3094

シャクシャイン記念館

〒056-0011 新ひだか町静内真歌7-1
TEL0146-42-6792

浦河町立郷土博物館

〒057-0002 浦河町西幌別273-1
TEL0146-28-1342

幕別町蝦夷文化考古館

〒089-0563 幕別町千住114-1
TEL0155-56-4899

網走市立郷土博物館

〒093-0041 網走市桂町1丁目1番3号
TEL0152-43-3090

弟子屈町屈斜路コタン アイヌ民族資料館

〒088-3351 弟子屈町字屈斜路市街1条通14
TEL015-484-2128

釧路市立博物館

〒085-0822 釧路市春湖台1-7
TEL0154-41-5809

北海道外

国立歴史民俗博物館

〒285-8502 千葉県佐倉市城内町117
TEL043-486-0123

アイヌ文化交流センター

〒111-0041 東京都台東区元浅草3丁目7-1
TEL03-5830-7547

東京国立博物館

〒110-8712 東京都台東区上野公園13-9
TEL050-5777-8600

野外民族博物館リトルワールド

〒484-0005 愛知県犬山市今井成沢90-48
TEL0568-62-5611

松浦武四郎記念館

〒515-2109 三重県松阪市小野江町383番地
TEL0598-56-6847

国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
TEL06-6876-2151

天理大学附属天理参考館

〒632-8540 奈良県天理市守目堂250
TEL0743-63-8414

編集・執筆

小・中学生向け副読本編集委員会

委員長 阿部 一 司

副委員長 岡田 路 明

委員 石黒 文 紀

委員 清水 裕 二

委員 高橋 吾 一

委員 中村 和 之

委員 平山 裕 人

委員 古俣 博 之

委員 横山 むつみ

アイヌ民族：歴史と現在

——未来を共に生きるために〈改訂版〉

発行年月 2008年3月 初 版 第一刷

2024年9月 第十四版 第一刷

発 行 公益財団法人アイヌ民族文化財団

〒060-0001

札幌市中央区北1条西7丁目 プレスト1・7 5F

TEL 011-271-4171 FAX 011-271-4181

URL <https://www.ff-ainu.or.jp> E-mail ainu@ff-ainu.or.jp



学校名

氏名